2014 年マアジ

単位：数量、1000 トン、価格、円/kg

	数量										価格						ムロアジ	
年	漁獲	養殖	産地	輸入	東京 生鮮	東京 冷凍	東京 塩干	消費支出生(ｸﾞﾗﾑ)	在庫	加工塩干	産地	輸入	東京 生鮮	東京 冷凍	東京 塩干	消費支出生(円)	漁獲	産地
25	151	1.0	107.5	25.0	16.5	0.4	8.1	1,087	26.1	35.1	186	197	517	495	460	1,163	23.4	17.1
26	147		102.5	28.2	14.9	0.3	8.4	1,055	25.9		187	206	588	727	443	1,226	18.0	12.5
%	97	0	95	113	90	60	103	97	99	-	101	105	114	147	96	105	77	73

漁獲量と資源

26 年の漁獲量は 14.7 万トンで、前年(15.1 万トン)をやや下回り、平成 11 年以降の平均 20 万～25 万トン台を本年も引続き下回る低水準であった。

本年は、主力の山陰沿岸がやや上回ったが、東シナ海での減少が反映された結果、前年をやや下回る漁獲となった。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1970 年代後半に低水準であったが、1980～1990 年代前半に増加し、1993～1998 年には 50 万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999～2002 年には 28 万～42 万トンであったが、2003、2004 年には増加し、再び 50 万トンを超えた。2005 年以降は 40 万トン前後で経過しており、2013 年の資源量は 44 万トン、親魚量は 20 万トンで、Blimit（2001 年の親魚量 15 万トン）を上回っていると推定された。親魚量と加入量には正の相関があり、親魚量が少ない年には高い加入量が出現しない傾向がある、といわれている。

また太平洋系群の資源量は 1982 年から 1990 年代始めにかけて増加し、1990 年には高位水準になったが、1996 年の 16.2 万トンを頂点として減少した。その後、2000 年と 2001 年は増加したものの、2004 年以降は再び減少した。2013 年の資源量は 6.1 万トンと推定された。親魚量は 1984 年以降増加し、1992 年に最高の 6.4 万トンとなった。1993 年～2000 年まで 5 万トン前後で推移した後、2001 年～2010 年にかけて減少し、2011 年以降は横ばいで推移している。2013 年は 2.9 万トンと推定されている。

以上のように、対馬暖流系群、太平洋系群とも資源水準は中位・横ばい傾向にある、といわれている。

ムロアジ類

大中型まき網漁業のマルアジの資源密度指数は増減を繰り返しながら長期的には減少傾向で推移しており、近年では低い水準にある。マルアジを除くムロアジ類の資源密度指数は 1990 年代前半までは増減を繰り返しながら推移してきたが、1990 年代後半に減少し、2000 年代前半にかけて低い水準となった。その後、2006～2008 年にかけて増加傾向が認められたが、2009・2010 年には再び減少した。2013 年は 2012 年より減少した。マルアジおよびムロアジ類（マルアジ除く）の資源密度指数の相乗平均値は過去約 40 年間でみると低い水準にあり、最近 5 年間（2009～2013 年）では減少傾向で推移している、といわれている。（近年ＭＡＸ：1990 年　10.9 万トン）

産地水揚量と価格（48 港）

単位：数量、1000 トン、価格、円/kg

海域別水揚量

海域	25年	26年	前年比
東シナ海	58.3	52.4	90
山陰	39.4	41.7	106
豊後水道	0.4	0.5	137
九州東岸	3.4	2.0	59
薩南	1.2	1.3	104
太平洋	3.3	3.1	94
その他日本海	0.3	1.2	389
	107.5	102.5	95

月別漁獲量

月	25年	26年	前年比
1	5.00	7.57	151
2	5.07	7.66	151
3	5.64	4.97	88
4	4.74	7.28	154
5	10.60	8.26	78
6	14.14	9.58	68
7	12.29	13.96	114
8	9.40	6.94	74
9	16.09	11.08	69
10	10.78	10.49	97
11	5.52	8.70	158
12	7.04	5.77	82
計	107.50	102.50	95

月別価格推移

月	25年	26年	前年比
1	183	154	84
2	145	128	88
3	212	235	111
4	278	224	80
5	210	250	119
6	212	244	115
7	236	188	80
8	208	244	117
9	113	158	140
10	114	133	117
11	187	148	79
12	165	161	98
年平均	186	187	101

26 年のマアジの水揚量は､10.3 万トンで前年（10.8 万トン）をやや下回った。

九州西方海域では、年明け後の漁から春の盛漁期（４～６月）にかけても目立った漁がなく、7 月にまとまった漁獲があったのみで、その後の秋口から冬場の漁も目立った漁獲はみられず、その結果年間水揚げは前年を下回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（４～６月）には目立った漁にはならなかったが、昨年低調だった１～３月にややまとまったりょうがみられたことと、夏場から秋口にかけてまとまった漁があり、結果的には引続き本年も昨年をやや上回る水揚げとなった。

太平洋側では薩南海域がやや増加、東海海域が前年をやや下回る漁獲となった。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく本年も周年豆アジ（０～１歳魚）主体で推移し、豆アジ主体の小型魚は餌に回る割合が多く、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、187 円で全国的に水揚げ減もサイズも小さく前年（186 円）並みであった。

輸　入

26 年のアジの輸入は、2.8 万トンで前年（2.5 万トン）を上回ったものの近年の５～７万トンの範囲を依然大幅に下回る低水準であった。

本年は、オランダ 0.6 万トン（前年: 0.9 万トン)、ノルウェー0.4 万トン（前年：0.3 万トン)、英国 0.3 万トン（前年 0.1 万トン)、ドイツ 0.2 万トン（前年 0.1 万トン）で主力のオランダが数量を大きく減少させたのを始め、アイルランドも引続き大きく減少し、ノルウェー、イギリス、ドイツが増加したのが特徴である。また、韓国は 0.5 万トン（前年：0.4 万トン)、ベトナム 0.2 万トン（前年 0.2 万トン)、台湾は 0.1 万トン（前年：0.2 万トン)、中国が 0.08 万トンと前年（0.06 万トン）であった。

価格は、206 円で前年（197 円）をやや上回った。

在　庫　量

本年の在庫量は、2.6 万トンと前年（2.6 万トン）並みであった。

これは、国内生産の減少が、輸入の増加により相殺された形となった。

消費地入荷量と価格

26 年の東京消費地の入荷量は、生 1.5 万トン（前年：1.7 万トン）、冷 0.3 千トン（前年：0.4 千トン）、塩干物は 0.84 万トンで前年（0.81 万トン）であった。鮮魚・冷凍は減少、塩干開きはやや上回ったのが特徴である。

本年の 1 世帯あたりの消費支出は数量減少、金額は単価高もあって増加した。

価格は、生 535 円（前年：517 円）、冷 727 円（前年：495 円）、塩干 443 円（前年：460 円）で、入荷の増減を反映した価格推移であったが、冷凍は輸入原料の高値を踏襲した結果であった。